四国遍路の形成と修験道・山伏

長谷川　賢二（徳島県立博物館人文課長）

The foundation of the Shikoku henro created by yamabushi and Shugendo

Kenji HASEGAWA
Assistant Director (Humanities), Tokushima Prefectural Museum

This paper attempts to examine the formation process of the Shikoku henro from the viewpoint of the historical research of Shugendo. Discussions thus far have focused on such topics as the influence of the faith in Kumano and the development and permeation of the faith in Kobo Daishi, but it is necessary to reexamine the history of the formation of the Shikoku henro. The origin of the Shikoku henro is believed to have begun during the Heian period (794-1185) when *hijiri* (traveling priests) traveled along the coast of Shikoku as part of their ascetic training. Yamabushi carried on this tradition during the Middle ages. Then during the 13-14th century when Shugendo was formed the systemization of ascetic training by yamabushi was made clear, however this also included ascetic training in Shikoku. From this point, it can be assumed that ascetic training along the coast was considered to be something similar to ascetic training in the mountains in Shugendo. As well, when we keep in mind the training of yamabushi, we can understand the formation of the *fudasho* (sacred sites). Lodging structures were built for yamabushi to stay at when they trained on the mountains. The same situation occurred in Shikoku and I believe that these buildings led to the foundation of the network of fudasho along the Shikoku henro. I would also like to focus on the indirect influence that the activities of the yamabushi had on the formation of a union throughout Shikoku regardless of sects and the relationship between temples. It is safe to say that the role of the yamabushi as the driving force in connecting the sacred sites was large. This does not stipulate that yamabushi regulated the formation of the eighty-eight sacred sites nor how the Shikoku henro existed, but it is clear that without their existence and their activities the Shikoku henro would not have come about.

はじめに

四国遍路とは、弘法大師空海ゆかりとされる霊場（札所）八十八か所を巡拝する、日本の代表的な巡礼の一つである。また、札所を巡拝する行為自体も弘法大師の開創によるものと信じられている[(1)]。このような四国遍路の形態が完成をみたのは近世であり、大師信仰、「巡り」という巡礼者の行動様式、相互連携（ネットワーク）を含む霊場群のセット化という要素がパッケージとして構成され、現代まで継承されている。これらの要素がどのような経緯をもって形成されたのかということが重要である。

四国遍路については、これまで多方面から研究が行われており、数多くの論著が公刊されている[(2)]。そうした中で四国遍路の形成について大方の合意点とみられるのは、まず大師信仰が前提にあるということである。また、古代から中世にかけての聖（ひじり）の四国における修行を起点として、熊野信仰などの影響を受けながら、山伏や時衆、高野聖、六十六部聖などといった、中世の聖たちの活動が重層的に複合し、戦国期から近世初頭にかけて八十八か所巡拝として確立していくとされる。

筆者は四国遍路の形成過程、すなわち八十八か所巡拝の形態が成立する以前においては、山伏や修験道が果たした役割がことのほか大きいと考えている[(3)]。なぜなら、四国遍路の前提である中世の四国辺路は、山伏の修行として史料に現れており、修験道の形成とも関連しているとみられるからである。そこには、これまで強い影響が指摘されてきた熊野信仰が含まれているものの、山伏や修験道は熊野信仰とイコールではなく、四国における熊野信仰が四国遍路に統合されるのでもない。大師信仰についても同様で、四国におけるそれが四国遍路に収斂するのではなく、八十八か所以前の段階では大師信仰の卓越性を見出すことは困難である。

そこで本稿では、主として四国辺路の段階のあり方について、修験道・山伏に重点を置いて詳細を論じることを目的とする。以下では、通常は四国遍路形成の前提と位置付けられる大師信仰とそれにかかわる巡礼について検討する。次いで、12 世紀の聖による四国辺地修行のあり方を踏まえて、13 世紀以降の山伏の修行としての四国辺路について検討し、八十八か所巡拝としての四国遍路との関係について見通していきたい。

1　弘法大師信仰と霊場・巡礼

（1）大師伝と霊場

弘法大師信仰は 10 世紀末から 11 世紀、弥勒下生信仰と融合した入定信仰として定着するが、本稿の課題からすれば、四国を含む地方における信仰の広がりと浸透が重要である。その際、注目したいのが、霊場を中心とする弘法大師伝における記載である[(4)]。

そこで取り上げるのが、東寺長者経範による『大師御行状集記』[(5)]（寛治 3 年［1089］）である。大師ゆかりとされる伝説地・寺院の拡大が看取できる点において興味深い伝記である。「御房所々甚以多」として、各地における寺庵の創建が説かれているほか、「日本国中名所、皆被順礼云々。其御房数不可勝計」とあって諸国を巡歴するイメージも見られる。

四国に関しては、土佐国金剛定寺（金剛頂寺）に「建立一伽藍、数作坊舎」とされ、同寺の記載が多いのが特徴的である。また、阿波国大滝岳に「作置草庵」とされ、太龍寺の源流が示されている。これら 2 か寺は、『三教指帰』[(6)] に若き日の空海の修行地として挙げられている大滝岳、室戸崎に対応して重視されたものであろう。讃岐国では、大師の出身地である多度郡に「建立善通寺・曼荼羅寺」とされている。ここに見られた四国の 4 か寺はいずれも現在の札所となっている（金剛頂寺：26 番、太龍寺：21 番、善通寺：75 番、曼荼羅寺：72 番）が、大師聖跡としての真正性が認知された霊場であったことが知られる。

『大師御行状集記』とは別に、真言密教小野流のうちの金剛王院流の祖として知られる聖賢による『高野大師御広伝』[(7)]（元永元年［1118］）は、阿波国高越山寺（現在の高越寺）について、「大師所奉建立也。又如法奉書法華経、埋彼峯云々」と記されており、興味深い。高越寺は札所ではないが、12 世紀初頭に大師信仰の霊場として存在していたことが分かる。それだけに、四国八十八か所が大師信仰における伝統性を根拠として編成されているのではないことを示している。

（2）中世の四国に興隆した霊場

続いて、弘法大師伝に限定せず、中世の四国における大師信仰霊場に関する初見史料を見ていきたい。まず、阿波国焼山寺（12 番）について、『阿波国太龍寺縁起』[(8)]（13 世紀後半以降）に弘法大師が「求悉地成就之霊地、遂阿波国致焼山麓」とあるのは、焼山寺の霊場化を物語るとみられる。同寺には、応永 7 年（1400）銘の弘法大師坐像[(9)]が伝来しており、13 世紀には大師信仰の浸透があったと思われる。次に、土佐国の足摺岬に立地する金剛福寺（38 番）について、「前摂政一条実経家政所下文案」[(10)]（正嘉元年［1257］）に「当山寺是弘法大師現身証果之霊地」とある。同寺の場合、「土佐国金剛福寺僧弘睿解」[(11)]（嘉応元年［1169］）による限り、12 世紀にはまだ大師信仰の主張は見られない。また、前節で見た金剛頂寺と同じ室戸岬にある最御崎寺（24 番）について、「公文所信実書下案」[(12)]（文永 10 年［1273］）に「大師薬師之御領」と見え、また、「官宣旨案」[(13)]（嘉元 4 年［1306］）に「本尊者則嵯峨天皇御宇、応勅命本師（中略）手自刻彫、能満所願虚空蔵大菩薩也」、「弘法太師練行之時者、明星光臨道場」とある。さらに、菅生の岩屋（伊予国岩屋寺［45 番］）について、『一遍聖絵』[(14)]（正安元年［1299］）には全体としては「仙人練行の古跡」とされつつも、「一の堂舎あり。高野大師御作の不動尊を安置し奉る。即ち、大師練行の古跡」と部分的には大師信仰霊場としての要素も記されている。ここで見たのは、いずれも後の札所となる霊場であるが、13 ～ 14 世紀に大師信仰霊場が広範に現れていることが確認できる。大師信仰は時間をかけながら拡散・浸透したといえるだろう。

一方、後の札所に含まれる霊場でも、大師信仰に結びつかずに霊験が広く知られた例があることにも注目したい。『梁塵秘抄』[(15)]（12 世紀）に収められた今様に「四方の霊験所は、伊豆の走湯、信濃の戸隠、駿河の富士の山、伯耆の大山、丹後の成相とか、土佐の室生戸、讃岐の志度の道場とこそ聞け」というものがあり、当時の著名な霊場が列挙されている。この中にある志渡寺は、現在は 86 番札所であるが、中世に成立した縁起や近世の『四国徧礼霊場記』[(16)]（元禄 2 年［1689］）に記された縁起では大師信仰霊場としての性格はうかがえないのである。

（３）完成期の四国遍路と大師信仰

前節までに述べてきたのは、四国の大師信仰霊場には成立時期に幅がある上、札所に包含されるものとそうでないものがあるということ、一方で院政期から広く霊験が知られ、後に札所に含まれた霊場であっても、大師信仰と無関係のところもあるという、霊場の多様性についてである。こうした前提を考えれば、四国遍路を大師信仰の発展の結果と見るのは安易であることが理解されよう。

このことは、四国遍路の完成期である近世の史料においても確認できる。そこで改めて『四国徧礼霊場記』に注目したい。同書は、八十八か所の番次を定めたり、標石を建てたりするなど、遍路の基盤整備を進めたことで知られている真念の情報をもとに、高野山の学僧である寂本が著したものである。境内図や縁起などがまとめられ、当時の札所及びその他の霊場の状況が知られるという点で貴重である。これを通覧すると、17 世紀後半段階における大師信仰の位置付けがうかがえる[17]。縁起などの部分における弘法大師の事跡に関する記載の有無について、真念『四国辺路道指南』[18]（貞享４年［1687］）による情報も加味して整理したのが表１である（熊野信仰との関係もあわせてまとめているが、これについては後述する）。四国遍路の信仰基盤が大師信仰に一元化されていなかったことがうかがえるであろう。そうはいっても、『霊場記』の巻頭に「区々いづれも大師遊化し玉ふ霊蹤なり」と記されており、四国遍路を包括するのは大師信仰であるという認識は明確である。また、表１によれば、弘法大師との関連が明示されていないにもかかわらず、大師堂や御影堂など、大師信仰にもとづく施設が設けられている場合がある。このようなあり方は、霊場の基底に大師信仰があったのではなく、霊場の展開や縁起の形成の中で大師信仰が付加された可能性を示唆しているであろう。中には、『霊場記』に事跡の記述が見られなくても、『道指南』には弘法大師制作の本尊があるとされている場合もあるので、伝承自体に振幅があったものとも考えられる。以上より、大師信仰を無視することはできないが、四国遍路形成の絶対的な支柱としてとらえるのは適切ではないのである。

（４）弘法大師の聖跡と巡礼

ところで、大師信仰には、巡礼とかかわる側面がある。『大師御行状集記』には、「日本国中名所、皆被順礼云々」と見え、巡礼者としての大師イメージが記されていた。各地で活動する持経者の姿が描かれた『大日本国法華経験記』[19]（11 世紀）の第 60「蓮長法師」に「往詣金峰・熊野等諸名山、志賀・長谷等諸霊験、住於一々霊験名山、読誦千部妙法経。日本国中一切霊所、無不巡礼必誦千部」とあり、各地の霊験所や名山を巡ることを「巡礼」といっているものと符合しており、当時の巡歴の修行僧の姿と弘法大師をオーバーラップさせたものと思われる。したがって、巡礼者としての大師イメージは四国遍路の成立と直結はしないが、大師信仰と巡礼が密接に関係することがうかがえる。

このような大師イメージとは別に、中世には善通寺や曼荼羅寺をはじめとする、讃岐に所在する弘法大師ゆかりの霊場や行場を巡る僧がおり、「巡礼」と称している例もある。西行『山家集』[20]（12 世紀）には、「大師のおはしましける御辺の山に、庵結びて住み」曼荼羅寺の行道所、善通寺を訪ねていることが記されている。また、高野山正智院道範『南海流浪記』[21]（正嘉２年［1258］）には、「善通寺ニ詣テ、大師ノ聖跡ヲ巡礼ス」とあったり、「大師ノ御行道所」を訪ねたりしたことが見られる。これら以外にも、観音寺及び琴弾八幡宮（現在、前者は 69 番、後者の神宮寺であった神恵院が 70 番で、同一境内にある）に関して、『讃州七宝山縁起』[22]（徳治２年［1307］）によれば、「凡当伽藍者、大師為七宝山修行之初宿、建立精舎」とあり、大師の創始に係るとされる「七宝山修行」があったことが知られる。観音寺・琴弾八幡宮を起点として、山中に設けられた第２～５宿を巡り、我拝師山をもって結宿とする行程が描かれており、大師信仰にもとづく巡礼といってもよいが、山中の修行ゆえ、後述する斗藪に類似したものとみるのが妥当であろう。このほか、阿波国切幡寺（10 番）院主尊忍の「田地寄進状」[23]（正中２年［1325］）によれば、高野山で大師の聖跡を巡礼する四国の僧がいたことが分かり、大師信仰による巡礼に広がりがあったことがうかがえる。もちろん、四国内における巡礼が重要だが、それらは「四国辺地」「四国辺路」の修行とか、その構成要素などといわれてはいないことから、四国遍路の形成過程においては大師信仰の卓越性は認められないというか見通しを持つことができる。次章以下では、四国辺地・四国辺路について検討する中で大師信仰の位置づけにも言及することにする。

2　四国辺地と聖

（1）四国辺地

四国遍路の源流とされる、12 世紀の四国辺地の修行について検討していく。辺地修行を行ったのは、聖と呼ばれた宗教者である。次に見る『梁塵秘抄』の四国辺地に関する今様が、「僧歌十三首」のうち、聖に関するものの中に含まれていることからも了解されるであろう。

四国辺地は、『梁塵秘抄』や『今昔物語集』[24]（巻 31 の 14「通四国辺地僧、行不知所被打成馬語」）といった 12 世紀の文芸に初めて見出すことができる。前者には「我等が修行せしやうは、忍辱袈裟をば肩に掛け、又笈を負ひ、衣はいつとなくしほたれて、四国の辺地（原文では「しこくのへち」）[25]をぞ常に踏む」とあり、後者には「今昔、仏ノ道ヲ行ケル僧、三人伴ナヒテ、四国ノ辺地ト云ハ伊予・讃岐・阿波・土佐ノ海辺ノ廻也」と見えている。これらから分かるのは、四国の海岸部を巡る過酷な修行が辺地修行であり、四国における修行を一般的にいうのではないということである。

辺地修行を行った聖がどれほどいたのかは分からないが、具体的に名を残した人物に重源がいる。彼の自伝である『南無阿弥陀仏作善集』[26]（13 世紀初）によれば、保延 3 年（1137）「生年十七歳之時、修行四国辺（ヘチ）」、保延 5 年（1139）「於生年十九、初修行大峯、已上五ヶ度、（中略）葛木二度」とある。「辺」には「ヘチ」とルビがあり、「辺地」と同義とみられる。大峰・葛城山系における山林修行と並列的に、それと等価値の自然界での修行として「四国辺」の修行が行われたことが知られる。

では、四国辺地修行とはどのような意味を持っていたのだろうか。『今昔物語集』巻 17 の 18「備中国阿清、依地蔵助得活語」に「今昔、備中ノ国、窪屋ノ郡、大市ノ郷ニ一人ノ古老ノ僧有ケリ。名ヲバ阿清ト云ケリ。（中略）天性トシテ修験ヲ好テ、諸ノ山ヲ廻リ海ヲ渡テ、難行苦行ス」と見えることに注目したい。辺地の語はないが、「諸ノ山ヲ廻リ海ヲ渡テ、難行苦行ス」は重源の修行を彷彿させ、辺地修行と重ねることが可能であろう。修験とは、本来は験力（密教的な呪術能力）のすぐれた様をいうものだが、ここでは験力を獲得するための過程である「難行苦行」を指している。したがって、四国辺地修行は、修験に至るためのものと位置づけることができる。ただし、この段階ではまだ、宗教体系としての修験道は成立していない[27]。

なお、辺地修行を行う聖だけが四国で活動した宗教者ではない。『今昔物語集』巻 15 の 15「比叡山僧長増往生語」には、「伊予・讃岐ノ両国ニ乞匂ヲシテ年来過シツル也」という僧が描かれている。先に見た西行のように、大師聖跡を訪れる僧もいた。大師信仰も含みつつ、四国を旅する僧が辺地修行の周辺に存在したのである。ただ、辺地修行には大師信仰を明示する文言を伴う例がなく、大師信仰を過剰に評価すべきではない。

（2）聖と山伏

聖の活動は往生伝等に描かれている[28]が、ここでは『梁塵秘抄』を参照する。「聖の住所はどこどこぞ、大峯葛城石の槌、箕面よ勝尾よ、播磨の書写の山、南は熊野の那智新宮」と、各地の霊山を拠点にして活動する様が知られる。また、「柴の庵に聖おはす、天魔はさまざまに悩ませど、明星漸く出づる程、終には随ひ奉る」、あるいは「冬は山伏修行せし、庵とたのめし木の葉も、紅葉して散り果てて、空さびし、褥と思ひし苔にも、初霜雪降り積みて、岩間に流れ来し水も、氷しにけり」と歌われたように、山中にて厳しい修行を行っている。こうした姿が聖のすべてではないにせよ、典型視されたのである。

このような山林修行者として描かれた聖の姿は、山伏に近似している。すでに 10 世紀の『源氏物語』[29]若菜巻には「山伏の聖心」という表現があり、山伏と聖の相通じる様がうかがえる。上に見たように『梁塵秘抄』にも聖の「山伏修行」が描かれていた。また、『新猿楽記』[30]（11 世紀）には大験者とされた人物が「山臥修行者」とされており、験力の獲得と山における修行が不可分とされていたことが知られる。山伏という語は「山に伏（臥）す」という行為、すなわち山籠という修行形態[31]に由来するが、山伏修行に専門化した聖が山伏といわれるようになり、聖一般とは区別されていくことになると見通すことができるであろう。

四国辺地修行と修験の関係、聖の中から現れる山伏の存在に注目するとき、やがて辺地修行が修験道・山伏に接合されていくことが想定できるであろう。事実、辺地修行の後身である中世の四国辺路は、修験道形成期に山伏の修行の一部として現れることになるのである。

3　四国辺路と修験道・山伏

（1）四国辺路と山伏

13世紀以降には、修行を意味する場合を中心に、四国辺地は「四国辺路」と表記されることが多くなった。修行の経路や作法の定型化が関連するものであろう。そのように考えるのは、四国辺路が山伏の様々な修行の一つとして組み込まれていることがうかがえるからである。その初出として知られているのが、①「仏名院所司目安案」[32]（13世紀後半～14世紀前半）である。仏名院院主職をめぐる相論の史料で、朝顕（小野流を相承とみられる）という僧と現院主守誉（広沢流を相承とみられる）の側の仏名院所司が対立した際、朝顕が師頼遍の行動を肯定する主張において「不住院主坊事者、修験之習、以両山斗藪、瀧山千日、笙巌屈冬籠、四国辺路、三十三所諸国巡礼遂其芸、円遍門弟不可為山臥之由不存知」と述べている。「両山斗藪、瀧山千日、笙巌屈冬籠、四国辺路、三十三所諸国巡礼遂其芸」といった、熊野や大峰・葛城山系における入峰と巡礼を一括した修行が「修験之習」として定型化していたことがうかがえるとともに、それは山伏が行うものとして認識されていたことが分かる。

また、②神奈川県愛川町八菅神社所蔵碑伝（ひで）[33]（正応4年［1291］）の銘に「秋峯者松田僧先達、小野余流、両山四国辺路斗藪余伽三密行人、金剛仏子阿闍梨長喜八度［　　］／唵　正応四年辛卯九月七日／小野、滝山千日籠、熊野本宮長床□竹重寺別当生年八十一法印権大僧都顕秀初度以上三人」と記されており、①との類似が注目される。顕秀は熊野本宮長床衆の一員であるが、彼らは山伏であり、天台寺門派のもとにありつつも、醍醐寺の祖であり大峰修行を中興したといわれる聖宝を崇拝していた。顕秀が、聖宝を祖と位置付けている真言密教の小野流を相承しているのもその表れといえるだろう。

さらに、③徳島県神山町勧善寺大般若経巻208奥書[34]（嘉慶2［1388］）には、尾題前に「宴氏房宴隆」、尾題後に「嘉慶弐年初月十六日［般若菩薩／十六善神］／三宝院末流、瀧山千日、大峯葛木両峯斗藪、観音卅三所、海岸大辺路、所々巡礼／水木石、入壇伝法、長日供養法、護广八千枚修行者為法界四恩令加善 云々／後日将続之人々（梵字）（梵字）（梵字）（梵字）（梵字）［一／反］金剛資某云々、熊野山長床末衆　［（梵字）／（梵字）］（梵字）」とあり、①②と類似したものを確認することができる。小野流の一派である三宝院流を相承する熊野山長床衆（山伏）の宴隆が阿波で写経活動に加わって書いたもので、具体的な修行内容に「観音卅三所」とともに「海岸大辺路」が見える。三十三所と並列されていることから、これは「仏名院所司目安案」と同様に四国辺路と想定できる。熊野参詣路に紀伊半島の海岸をたどる「大辺路」があるが、熊野における辺路の呼称は近世初期に降る上、中世の山伏の修行として紀伊半島の海岸巡りは知られていないことから、熊野に当てる解釈は困難であろう[35]。

では、四国辺路の修行とはどのようなものであったのだろうか。ここに見た事例では①③において三十三所（西国巡礼）との並列があるが、四国のほうは③により12世紀以来の海岸巡りの修行であったということができるため、札所巡拝ではなかったとみてよい。また、②では「両山四国辺路斗藪」とあるように、大峰・葛城山系における修行と四国辺路がともに斗藪として一括されており、その点でも三十三所巡礼とは形態が異なり、峰中での修行に近い性質を持っていたと指摘する見解があるが、傾聴すべきであろう[36]。

海岸巡りの修行がいつまで続いたのかは分からないが、土佐国金剛福寺に熊野三山検校・聖護院門跡道興自画自賛といわれる不動明王像（明応3年［1494］）があり、彼の修行歴として「四州海岸・九州辺路」と記されていることが知られている。画賛や道興の活動を検討する限り、彼に仮託した後代の制作と考えざるを得ないものである[37]が、四国の海岸巡りの修行が「あるべきもの」として長く記憶されていたといえる。

ここで、四国辺路と大師信仰、熊野信仰との関係について触れておこう。①～③に見られたのは、いずれも真言密教を相承したとする山伏の例である。その意味では四国辺路は大師信仰を内包しているといってよいが、それは彼らの活動すべてにいえることであり、四国辺路だけの特徴とはいえない。また、熊野長床衆のように、天台寺門派のもとにある存在を考慮するなら、超宗派性を踏まえなければならず、真言宗との関係だけに単純化することはできない上、聖宝への信仰も併存するという複雑さにも留意すべきである。山伏の修行に含まれている三十三所巡礼は、天台寺門派が主体となって形成されたものでもある[38]。その点からも、大師信仰の突出をいうことはできないのである。

熊野信仰については、やはり①～③における「瀧山千日」は那智の滝における修行であり、三十三所巡礼も熊野信仰と深くかかわっている。また長床衆はいうまでもなく、熊野信仰に直結する。そうしたものと一

体化している四国辺路が、熊野信仰と深い関係を持つことは事実である。しかし、大師信仰と同様、山伏の修行自体が熊野信仰を内包しているということでもあり、四国辺路だけの特徴ではない。

なお、表１に示した近世の札所と熊野信仰の関係を見ると、熊野参詣や熊野権現の勧請など、何らかの形で確認できる例は数多い。熊野信仰は中世にもっともさかんであったことから、札所における痕跡も、少なからず中世における状況を反映しているであろう。熊野参詣の盛況、長床衆の活動の影響などがあるだろうし、熊野系の荘園や末寺・末社もまた熊野信仰の根を広げる原動力であった[39]。なお、熊野信仰がとくに四国に組織的に流布されたというものではなく、全国的な広がりの一端としてとらえる必要がある[40]。

熊野参詣は霊場への移動を伴うため、巡礼に通じる側面がある。そこで、これについて触れておきたい。参詣は、師檀関係（御師―先達―檀那の人的な結合）にもとづいて行われた[41]。「檀那」は参詣主体で、在地領主や民衆、僧を含む広範な階層の人々であった。「先達」は多くが山伏であったとみられ、参詣道中の案内等を行うガイドとしての役割を果たしたほか、王子社などの参詣途上の寺社における宗教儀礼を執行した。また、地方の檀那のもとへの配札、参詣できない檀那の代参などをした。先達に率いられた檀那は熊野に着くと、御師のもとへ赴いた。「御師」は、祈祷や宿泊、山内の案内を行った。こうした関係は熊野において一元的に把握されるのではなく、3者の個別契約が蓄積されていったものであるが、個々の契約は当事者だけでなく、子孫までも拘束するものであった。その意味では、師檀関係は檀那の信仰を管理する仕組みであり、とくに在地での山伏（先達）の影響力が大きかったと考えてよい。そして、参詣は長距離移動と複数の霊場への巡拝を引き起こすことから、修行としての四国辺路が、民衆を含む巡礼としての四国遍路へと転換していく素地をつくった要因の一つと想定することは可能であろう。

（２）修験道の成立と山伏の修行

四国辺路が山伏の修行の一部として確認できた事例は、13～14世紀のものであった。この時期は修験道史における画期でもあった。前節の①における修験と山伏の一体的関係、修行の定型化が進んで、13世紀末～14世紀、顕密仏教の一部門として修験道が登場するのである[42]。「顕・密・修験」などと表現され、伝統的な顕教・密教に新たな修験道を加えた3部門を兼修する寺院や僧は、それを秀でた側面として強調した。天台寺門派の本山である園城寺が中心だが、延暦寺（山門）や地方寺院でも類例が見られ、3部門鼎立観は短期間のうちに広がりを見せた。土佐国金剛福寺の「心慶譲状」[43]（元徳２年［1330］）には、心慶が院主職を村慶に譲補するにあたり、「爰阿闍梨村慶啻匪練行極、其功顕密両宗、長修験之道」としている。修験道が顕・密とは区別されているが、これは「顕・密」が学としての伝統を有する正統な仏教であるのに対し、「修験之道」は山岳等での修行によって験力を獲得・行使することを特徴とするため、明確な差異意識があったのであろう。

修験道形成の動向の中で注目されるのは、山岳での修行形態の変容である。先述のとおり、「山伏修行」は本来、山籠するものであったが、一方で12世紀には山中を移動しながら修行する山林斗藪への転換が進んでいくことになると考えられている。『諸山縁起』[44]（12世紀～13世紀初）には、葛城山系における修行の経路や、山中における仏神の居所・行場である宿（しゅく）[45]の記載があり、宿を通過しながら行程を進む修行のあり方ができていることが分かるのである。こうした斗藪は山伏の修行として一般化していったと思われ、13世紀には地方にも同様のスタイルが浸透している。「関東下知状」[46]（弘長２年［1262］）に見える越中国柿谷寺は「雖為私建立、北陸道之習、山臥通峰之時、依便宜令定于宿者、先例也、然者、当寺雖為医王山一宿」とされており、「通峰」すなわち斗藪のために宿が設けられていたのである。

同時期、寺内及び寺外における山伏の活動が活発化し、山伏に対する社会的認知が向上したことが知られている。こうした様相は斗藪の普及や行場の整備と並行的に進んだものと思われ、これを含む修行の体系化が進行しつつあったと考えてよかろう。『私聚百因縁集』[47]（正嘉元年［1257］に「山臥ノ行道」とあるのがそれを物語る。「醍醐寺僧綱大法師等申状案」[48]（文永10年［1273］）によれば、醍醐寺座主三宝院定済が座主職を譲補した道朝に対し、衆徒が「未有斗藪行人補貫首之例、道朝者雖嗜山臥之一道、未伺淵底於三密」として非難した例に注目すると、前節①と同様、寺院中枢における山伏の存在感の向上とともに、軋轢があったことが分かる。そして、「山臥之一道」が修行の体系性を意味することは容易に理解でき、「修験之習」と同様のものであったと想定してよいであろう。そこに四国辺路が含まれていることから、修験道は四国辺路と融合的な関係を内包して成立してきたという評価が可能となる。

（３）斗藪としての四国辺路

四国辺路と斗藪の関係について、より具体的に考えてみたい。残念ながら、辺路修行の内実は海岸巡りという以上のことを知る術はないが、斗藪行場である山岳に宿が設定されたということが四国辺路について考える上でも大きなヒントとなる。すでに、熊野参詣路における多数の王子社の配置はまさに宿をモデルにしたものという説がある[49]。山林斗藪や宿の成立期である12世紀には行われ始めていた西国巡礼は、天台寺門派の園城寺による修行であるが、これにおける三十三所についても、同寺が熊野三山検校職を概ね独占的に相伝し、やがて「顕・密・修験」鼎立観を主唱したことを踏まえると、斗藪行場の宿と同様に設定されたと考えてよいであろう。これらを前提とすると、四国辺路も宛てのない海岸巡りではなく、ポイントとなる場所、すなわち宿があったと考えるのが適切であろう。こうした宿がどこに、何か所あったのか、まったく分からないため、仮説にとどまるが、近世の四国遍路における札所制の源流は、中世の山伏の修行にあったと考えることができる。中には、海岸近辺にあった大師信仰の霊場や後の札所が含まれていたかもしれないが、今後、何らかの痕跡が見出せることを期待するほかない。

一方、四国には様々な修行地が散見される。すでに挙げた『讃州七宝山縁起』には、大師信仰にもとづいて山中の宿を経ていく「七宝山修行」が描かれていたが、斗藪に類似したものであることから、山伏が行った可能性は高い。また、『一遍聖絵』に描かれている菅生の岩屋（伊予国岩屋寺）の場面には「三十三所の霊崛あり。斗藪の行者、霊験を祈る砌なり」とある。ここにいう「霊崛」は大師信仰霊場ではないが、修行の場として「斗藪の行者」である山伏が訪ねてくる様子がうかがえる。さらに、『義経記』[50]（14世紀）には、弁慶の「四国修行」について、「阿波の国に着いて、焼山、つるが峰を拝みて、讃岐の志度の道場、伊予の菅生寺、土佐の幡多まで拝みけり」とある。当時における四国各国の代表的な霊場が挙げられていると理解でき、「焼山」は焼山寺、「つるが峰」は鶴林寺（20番）、「志度の道場」は志度寺、「菅生寺」は大寶寺（44番）と岩屋寺であろう。「幡多」は地域的な広がりを持つが、おそらく足摺岬と金剛福寺を含む霊場・修行地を指すものと思われる。なお、これらのうち鶴林寺は太龍寺とともに、その参詣路に14世紀の丁石があることが興味深い。修行とは別に、後の札所（太龍寺は既述のとおり大師信仰霊場だが、鶴林寺がこの段階でどのような性格を持っていたかは不明）には参詣者が集まる霊場として興隆していた場合があることを物語っている。

ほかにも、阿波では、「某袖判下文」[51]（正中2年［1325］）によれば、焼山寺に蔵王権現が祀られており、また高越寺に残る蔵王権現再興棟札[52]（永正11年［1514］）は同寺の蔵王権現の初見である。蔵王権現は、13世紀以降に山伏の祖として崇拝されるようになる役行者が感得したとされることから山伏との関係は深い。したがって、これが祀られている霊場は山伏の修行地でもあったと考えられる。

以上のうち、志渡寺や金剛福寺のように、明らかに海岸に近い立地の霊場とその周辺は辺路修行の舞台でもあったと思われるが、その他については不明とせざるを得ない。

（４）霊場接合の基盤

本稿冒頭で、完成された四国遍路の構成要素の一つとして、相互連携（ネットワーク）を含む霊場群のセット化を指摘した。このような広域的な霊場の接合が形成されたのは、中世にその基盤があったからではないだろうか。その意味で注目したいのが、中世に各地で行われた写経における広域的な連携と山伏による地域的な結合組織の例であり、いずれも寺社・人を結びつけていく動きということができる。

まず、写経については、先に巻208奥書に注目した勧善寺大般若経[53]を取り上げる（図1）。至徳4・嘉慶元年（1387）～嘉慶3・康応元年（1389）に阿波国大粟山（現在の神山町）で書写された勧善寺大般若経は、もとは柚宮八幡宮（現在の二之宮八幡神社）に奉納されたもので、写経所または写経者が所属した寺社等は大粟山を中心としているが、その外側の吉野川下流や鮎喰川下流にも見られる上、讃岐にも広がっていた。大粟山の鎮守と目される上一宮と神宮寺のような地域の有力な寺社とともに「坊」号を称する小規模寺院（村堂であろうか）も含まれていることから、規模・機能ともに様々な寺社等が、写経事業を軸に接合されているとみてよかろう。その中には、巻208奥書に見られた宴隆のような、四国辺路修行を行ったとみられる者もいた。巻210奥書に「金剛資宴氏房／於阿州板西郡吉祥寺書写畢　右筆侍従房禅裔之」とあることから、彼は大粟山からは離れた吉野川北岸の板西郡に移動して写経事業への結縁を進めたことが知られる。山伏が地域間交流の接着剤としての役割を果たしていたことがうかがえるであろう[54]。

次に、山伏の地域的結合組織について見ていく。事例は多くはないものの、全国的にいくつか知られており、その一つが阿波にあった。写本が伝来するのみであるが、「阿波国念行者修験道法度」[55]（天文21年［1552］）が関係史料である。吉野川下流・鮎喰川流域を中心とする阿波国北部の19か寺（坊）の山伏による理念的一国結合があったことが分かる（図1）。近世の情報による限りでは、修験道本山派・当山派を含む天台・真言系が混在し、宗派や本末関係を超えたものと考えることができる。この結衆は基本的には自律的に秩序維持を図りながらも、俗権力による介入を安全装置とするものでもあった。

以上、霊場群のセット化につながると思われる事例に触れてきた。現実的に寺社の接合を行い、宗教的ネットワークを形成した山伏の動向は、ここでも重要である。無論、彼らが八十八か所を形成したという意味ではなく、その基盤整備を進めたと考えるものである。

おわりに

本稿における検討により、四国遍路の形成過程における大師信仰や熊野信仰の意義、修験道・山伏の役割について了解されたことと思う。概ね修験道・山伏に特化した議論を進めたのは、中世の四国辺路と山伏の対応関係を踏まえ、それが四国遍路形成史における「主脈」と理解したからである。他の要因を排除する意図はなく、四国遍路の形成をとらえる上では不十分であるが、ご容赦願いたい。また、修行から民衆を含む巡礼への転換、これに伴うルートの変容なども検討課題である。本稿中でも関連する内容を取り上げたが、詳細については他日を期したい[56]。

註

(1) 番外の札所もあるため、関係する霊場の数はさらに多い上、札所の本尊の石像を配置した写し霊場も各地に見受けられることから、遍路に関連する信仰文化は拡大・拡散・多様化して浸透しているといえる。

(2) 比較的最近のものでも、四国遍路と世界の巡礼研究会編『四国遍路と世界の巡礼』（法蔵館、2007年）、頼富本宏『四国遍路とはなにか』（角川学芸出版、2009年）、星野英紀・浅川泰宏『四国遍路』（吉川弘文館、2011年）、武田和昭『四国辺路の形成過程』（岩田書院、2012年）、愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」研究会編『巡礼の歴史と現在』（岩田書院、2013年）、四国地域史研究連絡協議会編『四国遍路と山岳信仰』（岩田書院、2014年）、森正人『四国遍路』（中央公論新社、2014年）、武田和昭『四国へんろの歴史』（美巧社、2016年）と数多い。

(3) 拙稿「四国遍路の形成と山伏の関係をめぐる覚書」（『瀬戸内海地域史研究』8、2000年）、「弘法大師信仰・巡り・霊場ネットワーク」（徳島県立博物館編『空海の足音　四国へんろ展［徳島編］』四国へんろ展徳島実行委員会、2014年）などを参照。

(4) 大師信仰・伝承の展開については、白井優子『空海伝説の形成と高野山』（同成社、1986年）を参照。

(5) 『続群書類従』8下。

(6) 『日本古典文学大系　三教指帰・性霊集』。

(7) 註（5）に同じ。

(8) 『続群書類従』28上。

(9) 徳島県立博物館編、前掲註(3)書。

(10) 『鎌倉遺文』8105号。

(11) 『平安遺文』3512・3513号。

(12) 『鎌倉遺文』11424号。

(13) 『鎌倉遺文』22549号。

(14) 小松茂美編『日本の絵巻20　一遍上人絵伝』（中央公論社、1988年）。

(15) 『新日本古典文学大系　梁塵秘抄・閑吟集・狂言歌謡』。

(16) 中世の縁起は、香川県教育委員会編『新編香川叢書　文芸篇』（新編香川叢書刊行企画委員会、1981年）を参照。『四国徧礼霊場記』は、伊予史談会編『四国遍路記集　増訂三版』（伊予史談会、1997年）によった。

(17) 同書の大師堂の記載に注目したものに、重本哲也「四国における大師信仰の構造」（鳴門教育大学「四国遍路八十八ヵ所の総合的研究」プロジェクト編『四国遍路の研究』鳴門教育大学「四国遍路八十八ヵ所の総合的研究」プロジェクト、2003年）、宮家準「四国遍路の札所と修験」（同『神道と修験道』春秋社、2007年、初出2002年）がある。

(18) 伊予史談会編、前掲註（16）書。

(19) 『日本思想大系　往生伝・法華験記』。

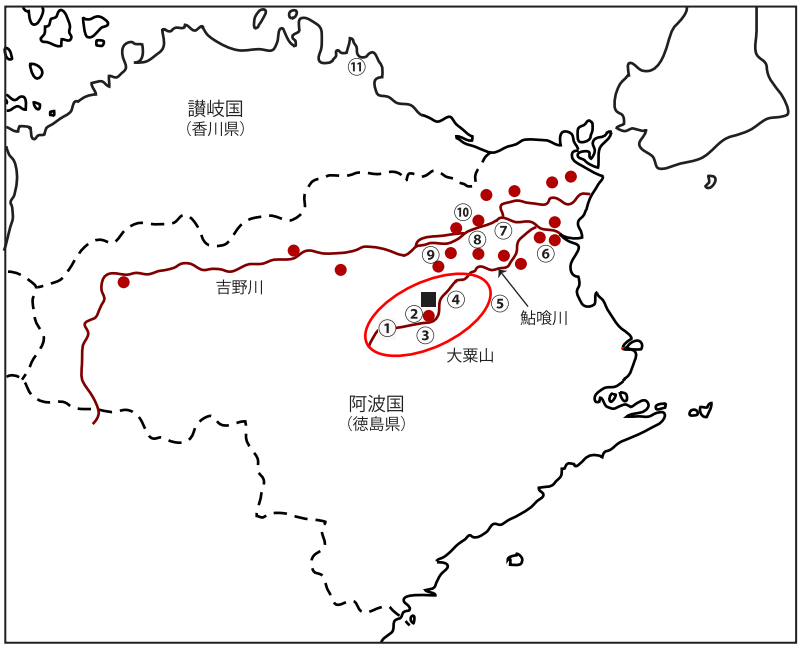
(20) 『日本古典文学大系　山家集・金塊和歌集』。
(21) 香川県編『香川叢書』2（香川県、1941年）。
(22) 香川県編『香川叢書』1（香川県、1939年）。内容は、武田、前掲註（2）書（2012年）を参照。
(23) 『鎌倉遺文』29093号。
(24) 『新日本古典文学大系　今昔物語集』。
(25) この「へち」を「辺路」とするものがあるが、同時期の他の用例からすると適切ではない。原文の記載は、愛媛県歴史文化博物館編『常設展示図録』（愛媛県歴史文化博物館、1995年）を参照。
(26) 奈良国立文化財研究所監修『南無阿弥陀仏作善集』（真陽社、1955年）。
(27) 拙著『修験道組織の形成と地域社会』（岩田書院、2016年）、徳永誓子「修験道の成立」（時枝務・長谷川賢二・林淳編『修験道史入門』岩田書院、2015年）。
(28) 速水侑『観音信仰』（塙書房、1970年）、井上光貞『日本古代の国家と仏教』（岩波書店、1971年）、平林盛得『聖と説話の史的研究』（吉川弘文館、1981年）。
(29) 『日本古典文学全集　源氏物語』。
(30) 『日本思想大系　古代政治社会思想』。
(31) 岡野浩二「平安時代の山岳修行者」（『国史学』221、2017年）。
(32) 『大日本古文書　醍醐寺文書』417号。
(33) 厚木市秘書部市史編さん室編『厚木市史　中世通史編』（厚木市、2009年）。
(34) 神山町史編集委員会編『神山町史』上（神山町、2005年）。
(35) 熊野における辺路の用例については、桑原康宏『世界遺産の地　熊野』（ウインかもがわ、2009年）、小山靖憲『熊野古道』（岩波書店、2000年）によった。
(36) 西耕生「「四国遍路」遡源」（四国遍路と世界の巡礼研究会編、前掲註［2］書）。
(37) 拙稿「勝瑞と修験道」（石井伸夫・仁木宏編『守護所・戦国城下町の構造と社会―阿波国勝瑞』思文閣出版、2017年）。
(38) 速水、前掲註（28）書、吉井敏幸「西国巡礼の成立と巡礼寺院の組織化」（真野俊和編『講座　日本の巡礼』雄山閣出版、1996年、初出1985年）。
(39) 宮家準『熊野修験』（吉川弘文館、1992年）、高橋修「中世前期の熊野三山検校をめぐる一考察」（『くちくまの』87、1991年）などを参照。
(40) 頼富、前掲註（2）書をはじめ、しばしば「熊野修験」が組織的に四国に入り込んだと説かれることがあるが、実態をとらえての見解とは考え難い。
(41) 師檀関係について論じたものは多いが、宮家、前掲註（39）書を参照。阿波の事例は、前掲註（27）拙著を参照。
(42) 註（27）に同じ。
(43) 『鎌倉遺文』30872号。
(44) 『日本思想大系　寺社縁起』。
(45) 小山貴子「中世の地域社会における修験「宿」」（『日本歴史』734、2009年）を参照。
(46) 『鎌倉遺文』8775号。
(47) 『大日本仏教全書　私聚百因縁集・三国伝記』。
(48) 『大日本古文書　醍醐寺文書』573号。
(49) 小山、前掲註（35）書。
(50) 『日本古典文学大系　義経記』。
(51) 神山町史編集委員会編、前掲註（34）書。
(52) 岡田謙一「高越寺所蔵「蔵王権現永正十一年四月再興棟札」」（『寺院史研究』10、2006年）。
(53) 註(51)に同じ。
(54) 写経への広域的な合力については、浅香年木「中世北陸の在地寺院と村堂」（同『中世北陸の社会と信仰』法政大学出版局、1988年）を参照。また、上野進「高野山正智院聖教にみる中世讃岐の寺院・談義所」（『坂出市史研究』3、2016年）が指摘する、中世の地方寺院の僧や聖教の移動、書写といった流動性を考慮すると、広域的な連携は日常的なものとみるべきかもしれない。
(55) 「良蔵院文書」のうちの1通として、『阿波国徴古雑抄』に掲載。
(56) 差し当たりの筆者の見解は、前掲註（3）拙稿（2014年）を参照されたい。

表１　霊場と大師信仰・熊野信仰

No.	国	道指南（1687）	霊場記（1689）		熊野信仰	現状	
			掲載順	大師の事跡		寺名	宗派
1	阿波	霊山寺	26	○		霊山寺	真言
2		極楽寺	27	×（大師像安置）		極楽寺	真言
3		金泉寺	28	○		金泉寺	真言
4		大日寺	29（黒谷寺、大日寺）	○		大日寺	真言
5		地蔵寺	30	○	熊野権現（霊場記）	地蔵寺	真言
6		安楽寺	31（瑞運寺）	○		安楽寺	真言
7		十楽寺	32	×		十楽寺	真言
8		熊谷寺	33	×（御影堂）	熊野祠（霊場記）	熊谷寺	真言
9		法輪寺	34	○		法輪寺	真言
10		切幡寺	35	○		切幡寺	真言
11		藤井寺	36	○		藤井寺	臨済
12		焼山寺	37	○	十二所権現（霊場記）、懸仏	焼山寺	真言
13		一宮寺	38（大日寺、一宮寺）	○		大日寺	真言
14		常楽寺	39	○		常楽寺	真言
15		国分寺	40	×		国分寺	曹洞
16		観音寺	41	○		観音寺	真言
17		井土寺	42（明照寺、井戸寺）	○		井戸寺	真言
18		恩山寺	43	○		恩山寺	真言
19		立江寺	44　附　取星寺	○		立江寺	真言
20		鶴林寺	46	○	熊野権現（霊場記）	鶴林寺	真言
21		太龍寺	47	○	（大隆寺檀那〔本宮文書〕）	太龍寺	真言
22		平等寺	48	○	先達（那智文書）	平等寺	真言
23		薬王寺	49	○	先達（那智文書）	薬王寺	真言
			45（慈眼寺）	○			
24	土佐	東寺（最御崎寺）	50	○		最御崎寺	真言
25		津寺（津照寺）	51	○		津照寺	真言
26		西寺（金剛頂寺）	52	○	若一王子（霊場記）	金剛頂寺	真言
27		神峰寺	53	×（大師堂）		神峰寺	真言
28		大日寺	54	○		大日寺	真言
29		国分寺	55	×（御影堂）		国分寺	真言
30		一之宮	56（神宮寺、一宮）	×		善楽寺	真言
31		五台山	57（竹林寺）	○		竹林寺	真言
32		禅師峰寺	58	○		禅師峰寺	真言
33		高福寺（雪蹊寺）	59（高福寺）	○		雪蹊寺	臨済
34		種間寺	60	×		種間寺	真言
35		清滝寺	61	×（弟子）		清滝寺	真言
36		青竜寺	62（青龍寺）	○		青竜寺	真言
37		五社	63（仁井田五社）	×*		岩本寺	真言
38		蹉蛇山	64（金剛福寺）	×（大師堂）	熊野権現（霊場記）、先達（金剛福寺文書）	金剛福寺	真言
39		寺山院	66（延光寺）	○		延光寺	真言
			65（月山）	×			
40	伊予	観自在寺	67	○		観自在寺	真言
41		稲荷宮	69（稲荷）	○		龍光寺	真言
42		仏木寺	70	○	熊野三所権現（霊場記）	仏木寺	真言
43		明石寺	71	○	熊野十二所権現（霊場記）	明石寺	天台
44		菅生山	72（大宝寺）	○		大宝寺	真言
45		岩屋寺	73	○	大那智（霊場記）	岩屋寺	真言
46		浄瑠璃寺	74	×		浄瑠璃寺	真言
47		八坂寺	75	×		八坂寺	真言
48		西林寺	76	○	三所権現（霊場記）	西林寺	真言
49		浄土寺	77	×		浄土寺	真言
50		繁多寺	78	×	熊野権現（霊場記）	繁多寺	真言
51		石手寺	79	○	熊野十二所権現（霊場記）、山号「熊野山」	石手寺	真言
52		太山寺	80	×		太山寺	真言
53		円明寺	81	○		円明寺	真言
54		延命寺	82	×		延命寺	真言
55		三島宮	83（光明寺）	×		南光坊	真言
56		泰山寺	84	○		泰山寺	真言
57		八幡宮	85（石清水八幡宮）	×		栄福寺	真言
58		佐礼山	86（仙遊寺）	×		仙遊寺	真言
59		国分寺	87	×		国分寺	真言律
60		横峰寺	88	○	石鎚…熊野権現飛来（垂迹縁起）	横峰寺	真言
61		香園寺	89	○		香園寺	真言
62		一之宮	90（宝寿寺）	×		宝寿寺	真言
63		吉祥寺	91	○		吉祥寺	真言
64		里前神寺	92	×	石鎚…熊野権現飛来（垂迹縁起）	前神寺	真言
65		三角寺	93	○		三角寺	真言
			68(観世音寺)	○	三所権現（霊場記）		

66	讃岐	雲辺寺	9	○		雲辺寺	真言
67		小松尾山	8（大興寺、小松尾寺）	○		大興寺	真言
68		琴引八幡宮	7	×		神恵院	真言
69		観音寺	6	○		観音寺	真言
70		本山寺	5	○		本山寺	真言
71		弥谷寺	11	○		弥谷寺	真言
72		曼荼羅寺	3	○		曼荼羅寺	真言
73		出釈迦寺	2	○		出釈迦寺	真言
74		甲山寺	4	○		甲山寺	真言
75		善通寺	1	○		善通寺	真言
76		金蔵寺	12（金倉寺、道善寺）	×（親族）		金倉寺	天台
77		道隆寺	13	○		道隆寺	真言
78		道場寺	14	○		郷照寺	時宗
79		崇徳天皇	15（妙成就寺）	○		天皇寺	真言
80		国分寺	1	○		国分寺	真言
81		白峰寺	17	○	先達（那智文書）	白峯寺	真言
82		根香寺	18	○		根香寺	天台
83		一之宮	19（一宮寺）	×＊		一宮寺	真言
84		やしま寺	20（屋島寺）	○	（屋島高松寺先達〔那智文書〕）	屋島寺	真言
85		八栗寺	22	○		八栗寺	真言
86		志度寺	23	×		志度寺	真言
87		長尾寺	24	○		長尾寺	天台
88		大窪寺	25	○		大窪寺	真言
			10（金毘羅権現）	×			
			21（洲崎の堂ならびに継信墓）	○			

註
1）出典略号
道指南＝四国辺路道指南
霊場記＝四国徧礼霊場記
本宮文書＝熊野本宮大社文書（本宮町史）
那智文書＝熊野那智大社文書
垂迹縁起＝長寛勘文所収熊野権現御垂迹縁起（群書類従）
2）表中の＊は、『道指南』に弘法大師製作の本尊が所在するとされていることを示す。



① 神山町上分・下分…千野坊
② 神山町阿野（阿川地区）…政所、地福寺、禅宴房
③ 神山町神領…上一宮、神宮寺、長満寺、長宝寺
④ 神山町鬼籠野…勧学坊
⑤ 佐那河内村…主蓮寺
⑥ 徳島市蔵本町ほか…法勝寺、真仏寺
⑦ 徳島市国府町芝原…種蓮寺
⑧ 石井町高原桑島…多門坊
⑨ 吉野川市鴨島町牛島…八幡宮、長福寺
⑩ 板野町西部ほか…吉祥寺
⑪ さぬき市…遍照坊、岡坊
■ 柚宮八幡宮
● 「阿波国念行者修験道法度」における「念行者」構成寺院（坊）

図１　勧善寺大般若経・念行者修験道法度関係略図